

舟橋聖一

源氏物語

(下)

丹楊聖一

源氏物語

舟橋聖一源氏物語(下)

一九七六年十二月十五日 初版第一刷発行

著者 舟橋聖一

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社・平凡社

東京都千代田区四番町四番地の1

郵便番号 102

電話(03)26510451(大代表)

振替 東京8129639

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社・石津製本所

舟橋聖一源氏物語（下） 目次

紅葉賀

五五一

花宴

六〇五

葵

六二五

賢木

七〇七

花散里

七九三

須磨

八〇一

明石

八七五

濤 標

九三三

蓬 生

九八五

関 屋

一〇一五

絵 合

一〇三一

松 風

一〇五七

連載第一回目の筆を擱くにあたつて
今や世界の源氏物語

一〇六九

国文学者からみた「舟橋源氏」

一〇七一

阿部秋生

一〇九九

備をほどこされて住まわせていらっしやる。ご自分も始終紫君の部屋へお出掛けになって、さまざまな方面の教育に余念がなかった。手本を書いて手習いをおさせになったりしながら、今までよそに預けてあった息女を、ひきとったような気でいらっしやるのだ。一種殊勝な父親気分というところだろうか。

この御殿の係の役人たちは、政所にしても（註・摂政・大臣家で、その領地の事務および家政を行なうところ、およびこの職にある人をも言う）、家司にしても、特に選考した者であって、幼い姫に何不足のない、貴族的生活をさせておいでになる。そんな厚い待遇につけても、惟光以外は対の主が誰れであるかを知らないから、皆内心ではいぶかしく思っているのだった。

かの父君兵部卿宮も、まさか娘が二条院にいたとは、夢更ご存じないのだった。

紫君はふと以前の生活を思い出したりすると、尼君恋しさに、今でも涙を落すことが多かった。光君がご在宅の間は紛れていらっしやるのだが、夜など稀に紫君のお傍へお泊まりになることはあっても、お通いになる先が多くて日が暮れるとお出掛けになるのを、悲しがってあとを追う。

光君はそんな時の幼いひとが、いとしくてならない。

二、三日御所に伺候して、そのあとつづいて左大臣家へお越しになる折などは、紫君が全く滅入りこんでおしまになるので、まるで母親のない子を持っているような不憫な気がして、ほかの女性と逢っていても、光君はさっぱり心が落着かない状態だった。

北山の僧都はそんな報告を受けられて、姫君の幼さを思えばそうした厚遇を不思議とは思うものの、やはり嬉しかった。

かの尼君の法事を営まれた時にも、僧都のもとへは、光君からさまざまな御供物が届けられ、ねんごろな弔問があったのだ。

舟橋聖一源氏物語（下）

朱雀院^{すざくいん}の行幸は、神無月（十月）の十日あまりの予定であった。（この行幸については、若紫・末摘花の両巻でも多少触れてあったが、詳細にわたっては、記されていなかった。この巻は、その年——即ち、光君十八歳の秋に行なわれた行幸の御儀から、翌る年、光君十九歳の秋にわたる、約一年間の物語である）

さて、このたびの行幸はなみなみならぬ興味的な行事で、その前評判は大へんなものであった。ただ、朱雀院でのお催しであるから、女御・更衣などは、直接陪観できないことを残念がっていられた。

帝も愛する藤壺の女御さえご覧になれないのを、遺憾に思召されて、当日にさきがけ、御所でその予行演習ともいうべき試楽をおさせになった。

源氏の中將は、青海波^{せいがいは}（註・唐楽・二人舞）をお舞いになった。二人舞のお相手は、左大臣家の頭中將だった。容姿・心ざまなど、人よりは優れているこの貴公子も、光君と肩を並べては、いつも言うことだが、完全に圧倒されて、いわば、花の傍らの深山木^{みやま}のように影がうすれてしまうのだ。

落日前の一刻。

虹をふくんだような鮮やかな光線が、あたりを彩る。楽の音も一入響きわたる……。

今しも感興^{こんげん}たけなわの折から、青海波を舞い出された光中將の姿には、この世のものとも思われぬ美と粹が、渾然^{こんぜん}としてやどっているかに見えた。その足拍子の見事さ、華麗にしておごそかな風貌、おなじ舞であっても、こういう抜群の舞手を得た今日の青海波は、見る者に、異様なまでの感銘を与えずにはおかなかった。

舞に合せて詩をお詠じになるところなどは、これが佛の迦陵嚩伽^{かりうわんが}（註・極楽にいる鳥。声が殊に美妙なので、妙声鳥ともいう）の声であろうかと想像された。巧妙にしてあわれを帯びた光君の舞振りに、帝は思わず涙をおぬぐ

い遊ばす。陪席した上達部、皇子たちも、胸がいっぱいになって、みな泣き給うた。

詠がおわって、更にすすんで舞い出すために、袖を打直された。それを待つてはじまる渦巻くような賑やかな奏楽のひびき。舞手の頬もようやく紅潮する。常にもまして、燦然と光りかがやく君と拝されるのだった。

ところで、観衆の一人である春宮の御母弘徽殿の女御だけは、光君のこういう美しさを認めながらも、——いや、それを無視できないことによって、内心の妬ましさがいっそう助長されて、

「鬼神なんぞが、空から魅入りそうな様子なこと。なんだか薄気味の悪い」

と、吐き出すように仰せになるのだ。若い女房などは、見えすいた女御の嫉妬心を、情ないと思つて耳にとめるのだった。

また、藤壺の宮はどうであつたろう。

これで光君が、大それた背信の念をおいだきでなかつたら、そして自分との間も、青天白日の清いものであつたなら、この麗姿も舞も、当然、もっともっと美しく見えてよい筈である。それくらい恋の炎が、冷静な鑑賞のさまたげになるにつけても、果してあれが現実のことであつたのかと、藤壺の君は、妖しい夢心地に見舞われ給うのであつた。

その夜は、そのまま清涼殿におとどまりになって、藤壺の宮が帝の御宿直をつとめられたのである。

「今日の試楽は、青海波にすべての興をさらわれた感じだね。どう思いますか」

と帝が藤壺の宮におたずねになる。宮はなんともお答え遊ばし難いお顔つきだ。

「格別、結構でございました」

と、それだけ仰有る。

「相手役（頭中將）も悪い出来ではなかつたようだね。貴公子の舞には、やはり独特なよいものがある。もっと

も評判の舞の専門家たちも、すぐれて上手には違いないが、どういうものか、おっとりとして優美なおもむきという点では、表現力の問題ではなくて、持って生まれたものの相違が、舞にあらわれるのだらうね。試案の日にこう仕尽してしまったのでは、行幸当日の紅葉の興が淋しくなりはしまいかと思うけれど、あなたに見せてあげたかったものだから……」

肌に冷たい汗を感じていらっしやる藤壺の宮ともご存じなく、帝は明るくお言葉をにつづけられた。

翌朝、藤壺の宮のもとに、光君から御消息がといた。

「いかがご覧くださいましたか。何んとも言えず、無我夢中で舞ったのですが、

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖打振りし心知りきや

(註・あなたを思う憂悶のために、とても舞ったりできない筈の私が、ともかくも舞いながら袖を振った心を、あなたは知っていただくたでしょうか)

あなかしこ」

とある。

まるで陶然と酔い心地のようになるほど美しかった昨日の舞のお姿をご覧になったあとでは、藤壺の宮もこれまでのお心強く知らぬ顔もできなかったのであらうか、お返事の筆をおとりになった。

唐人の袖ふることは遠けれど起ち^たゐにつけてあはれとは見き

おほなたには

(註、「あなたが袖を振られた理由を、私はよく存じませぬが、あの舞の手振りは、立居につけてしみじみと拝見いたしました」袖を振るのは、思慕の心あるを示す所作。前の歌の「袖うちふりし心」を受けて、「遠けれど」とは、あなたと私とははるか遠くへだたった関係にある、という意をふくめた。以上のほか、唐楽の故事は、はるかな唐の音楽で、註しく知るよしもないがという意。唐は遠いの意をかけている)

と、したためられた。

要するに、光源氏と藤壺女御との間には、やはりこんな恋歌の応酬があったのである。

稀に得た藤壺の宮からの御消息のなつかしさ、光君は欣喜の念につつまれてご覧になる。藤壺の御歌は、異朝における青海波の曲の起源まで、十分心得てつくられたものであった。すでにもう后きさといのみや宮らしい見識をそなえておられると、光君は自然に微笑がお浮かびになって、その御文を有難い持経(註・平常、肌身はなさず持っている経典)のようにひろげ、いつまでも見入っていらっしやるのだった。

二

朱雀院行幸の当日がきた。

その日は、皇子たちをはじめ、公卿も殿上人も、ある限りの人々が帝の供奉ぐぶをしたのである。

春宮も行啓遊ばされた。

奏楽の舟が池面を漕ぎめぐり、唐楽、高麗楽、舞楽の曲目は数のかぎりを尽した。楽のひびき、鼓の音は、天地を揺るがすとも思われる。

あの試楽の行なわれた日、帝は残照に映えた光君のお姿の美しさに、なにかそら恐ろしいものをお感じになっ

た。魔性の障りが魅入りでもしないかと危懼^{きく}遊ばして、この当日には、方々の寺々で、魔除けの御祈禱をさせられた。それを漏れきく人々は、尤もなことで、御親子の情をお察し申上げたが、ひとり弘徽殿の女御のみはおだやかならず、

「なにも、それほどまでになさらなくてもよからうに。御最眞の度が過ぎるようですね」

と光君に対する帝の御寵愛振りを非難し、惡^{にく}まれるのだった。

さて、御宴の垣代^{かしろ}（註・楽屋の外部、舞台の下手に、垣のように四十人丸く並んで笛だけを吹く）などには、殿上人からも地下^{じげ}からも、優秀な技倆をみとめられているその道の達人ばかりが選拔されたのである。参議が二人、それから左右の衛門督が、左は唐楽、右は高麗楽の監督の任にあたった。

『湖月抄』では、

へかいしろゝは垣代也。警固也。垣に立て、此内にて装束を着する也

となつてゐる。

舞手はめいめい、良師を家に招き寄せて、今日にそなえて猛稽古を積んでいたのである。そして今日こそ、その真価が発揮される時であった。木高い紅葉のかげに、四十人の垣代が吹き調べる笛の音。それにさそわれて吹きまよう松風は、まことの深山おろしかと思われた。

やがて、散り交う紅葉の極彩色を繡^ぬって、青海波の舞手光君が絢爛と歩み出た時は、この世ならぬ美の演出に、誰れもがしばし息をのんだ。

光君が冠にさした挿頭^{かざし}の紅葉が、すっかり風に散り透いて、お顔の匂にけおされたような感じがするので、左

大將が御前の菊を折って挿しかえた。

日暮れ前になって、ばらばらとわずかにしぐれた。實際それほどまでの美しさに、更にさまざまな色どりに目うつりするような菊の花をかざし……殊に今日は、試楽の日以上の秘術をつくしての入舞（註・入りぎわに引返してきて舞うこと。入綾）に、見る者はあまりのよさに、ぞっと身にしむ寒気さえおぼえて、はたしてこれが人間業かと目を疑った。

何んの見境もつかぬ下賤な者でさえ、木の下、岩がくれ、あるいは山の木の葉に埋れるようにして見ていたのまでが、少しでも物に感じやすいものは、皆涙をこぼしていた。

承香殿の女御を母にした第四親王が、まだ童形のまま秋風楽（註・嵯峨帝の時代に改作せられた曲名。唐楽）をお舞いになったのが、それについての見物であった。この二つにスポット・ライトが集中してしまったので、他の舞には目も移らず、却つてないほうがよかったくらいのものだった。

その夜、光君は正三位に叙された。頭中将は正四位の下に昇られた。

他の公卿たちにも波及して、昇進する者が多かったが、このよろこびも、皆、光君の余徳によるところであった。無類の美貌や、卓越した舞の芸で人目を驚かし、かつは見る人の心をもよろこばせ得るこの光君には、前世でどんな素晴らしい善業があったのだろうか。

寛弘五年十月十六日一条天皇が、関白道長の邸へ行幸した時のことが『紫式部日記』にみえている。多分これが朱雀院行幸のモデルになっていて、そこから紫式部の見聞したこの取材が基になっているのではないかと想像される。よって参考のために以下抜粹する。

その日、あたらしく造られたる船ども、さし寄せさせて御覧す。竜頭鶴首りゅうとうかくしゅの生けるかたち思ひやられて、あざやかにうるはし。行幸は辰の時と、まだ暁より人々けさうじ心づかひす。上達部の御座は西の対なれば、こなたは例のやうにさわがしうもあらず。内侍の督かの殿の御かたに、なかなか人々の装束などいみじうとのへ給ふと聞こゆ。(中略)

御興むかへ奉る。船楽いとおもしろし。(中略)

御帳の西面に御座ましをしつらひて、南の廂のひんがしの間に、御椅子いしを立てたる、それより一間へだてて、ひんがしにあたれるきはに、北南のつまに、御簾をかけへだてて女房のゐたる南の柱もとより、すだれをすこしひきあげて、内侍ふたりいづ。(中略)

暮れゆくままに楽どもいとおもしろし。上達部、御前にさぶらひ給ふ。万歳楽まんざいらく、太平楽、賀殿などいふ舞ども。長慶子ちやうけいしをまかで音声おんじやうにあそびて、山のさきの道を舞ふほど、遠くなりゆくままに、笛の音も、鼓のおとも、松風も、木深く吹きあはせていとおもしろし。(後略)

この末座に紫式部も連なっていて、一条天皇行幸の盛儀を拝観したに違いないと思う。

その頃——藤壺の宮は、御所からご実家のほうへお退りになった。

どういう理由かはまだ書かれていないが、小学館本によると、左のような説明がある。

「藤壺の里下りは後の記事からもわかるように、懷妊のためであった」

お逢い申す機会をつかまえようとして、例によって光君の心は、暇をぬすんではお歩きなさることに専念し、左大臣家へも目にみえて疎遠そえん(夜離れ)になった。で、左大臣家からは何やかやヤイノヤイノと騒がれる始末だった。

葵上には光君への苦情が積もっているところへ、あの紫君も二条院へおひきとりになったという聞き捨てならぬ情報伝わってきたのである。

「お側近くへ新しい人をお迎えになりましたそうです」

との女房たちの噂に、葵上はひとときわ不快の念や恨めしさをお覚えになるのだった。

ところで光君にはまだ、そんな葵上に対して、一通りの反撃や、釈明の用意がないわけではなかった。自分が葵上に抱いている感情だとか、また二条院へひきとった紫君が、まだ十歳そこそこの少女にすぎないという真相まで詳しくはご存じないのだから、お腹立ちになるのも道理だけれど、それならそれでやり方があるう。もつとさっぱりとして、普通の女らしく狐色にこんがり焼くのだったら、こちらも腹藏なくことの経緯、自分の気持などを打明け、慰めてあげることも出来るのである。それを、思いもよらぬ方向にばかり勝手な邪推を積んでいらつしやる態度が厭で、つい他の女に、芳し^{かんば}からぬ浮気心が募っていくことになるのである。

とにかく葵上という女性^{かんば}は、どこといって不足も欠点も見あたらない満足に近い人であることは、光君もすでに充分は認してい^{かんば}らつしやる。

まして、最初に夫婦になったのであるから、心の裡ではどれほど愛しく思い、尊重しているか知れないのに、それが相手にわからぬ間は何を言っても徒勞である。そのうちにはきつとこちらの真情が通じ、お互いの心が触れ合う時機も来るであろう。ちょっとしたことでは、自分に背いていくような軽はずみな性格でないのを、光君も頼みにしてい^{かんば}らつしやるのだが、たしかにそういう点ではこの葵上は、人と違う信頼のおける方なのだった。一方幼い紫君は、慣れるに従って性格のよさ、顔立の美しさなどが、ますます光君の目を惹いた。無邪気かつ親愛を寄せて来る様子が、まことに可愛らしい。

当分の間は、二条院内の人にも姫の素姓を知らせまいという心づもりで、相変らず御殿の西の対に、立派な設

備をほどこされて住まわせていらっしゃる。ご自分も始終紫君の部屋へお出掛けになって、さまざまな方面の教育に余念がなかった。手本を書いて手習いをおさせになったりしながら、今までよそに預けてあった息女を、ひきとったような気でいらっしゃるのだ。一種殊勝な父親気分というところだろうか。

この御殿の係の役人たちは、政所にしても（註・摂政・大臣家で、その領地の事務および家政を行なうところ、およびこの職にある人をも言う）、家司にしても、特に選考した者であって、幼い姫に何不足のない、貴族的生活をさせておいでになる。そんな厚い待遇につけても、惟光以外は対の主が誰れであるかを知らないから、皆内心ではいぶかしく思っているのだった。

かの父君兵部卿宮も、まさか娘が二条院にいるとは、夢更ご存じないのだった。

紫君はふと以前の生活を思い出したりすると、尼君恋しさに、今でも涙を落すことが多かった。光君がご在宅の間は紛れていらっしゃるのだが、夜など稀に紫君のお傍へお泊まりになることはあっても、お通いになる先が多くて日が暮れるとお出掛けになるのを、悲しがってあとを追う。

光君はそんな時の幼いひとが、いとしくてならない。

二、三日御所に伺候して、そのあとつづいて左大臣家へお越しになる折などは、紫君が全く滅入りこんでおしまになるので、まるで母親のない子を持っているような不憫な気がして、ほかの女性と逢っていても、光君はさっぱり心が落着かない状態だった。

北山の僧都はそんな報告を受けられて、姫君の幼さを思えばそうした厚遇を不思議とは思うものの、やはり嬉しかった。

かの尼君の法事を営まれた時にも、僧都のもとへは、光君からさまざまな御供物が届けられ、ねんごろな弔問があったのだ。